



少し冷めた
— SUKOSHI SAMETA MURABITO —
村人少年の
— SYONEN NO BOUKENKI —
冒険記

2

AUTHOR

mizuno sei

Illustration: Akaike



登場人物紹介

ポピィ

《暗殺者》のギフトを持つ、
頑張り屋の少女。人間とノームのハーフ。

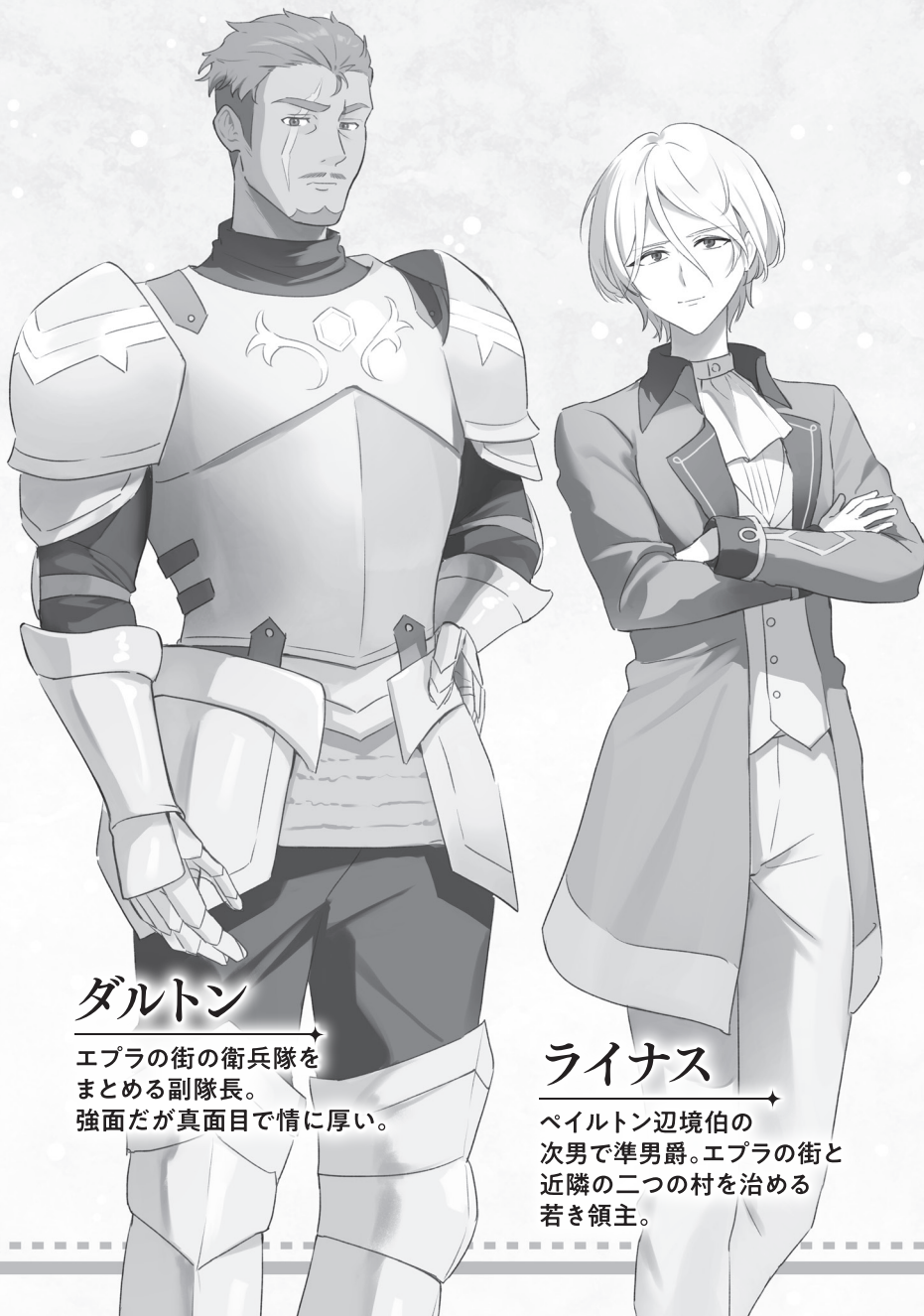


トーマ

少し冷めた性格の、
本作の主人公。
規格外の能力を活かして
相棒《ナビ》とともに
異世界を旅する。

スノウ

世界樹を守る神獣の子。
可愛らしい見た目をしているが、
秘めている力は強大。



ダルトン

エプラの街の衛兵隊を
まとめる副隊長。
強面だが真面目で情に厚い。

ライナス

ベイルトン辺境伯の
次男で準男爵。エプラの街と
近隣の二つの村を治める
若き領主。

1 ついに収納魔法を習得したよ

日本でシステムエンジニアとして働いていた俺——モチヅキコウキは、過労がたたって倒れ、異世界の少年トーマとして転生した。

貧しい農家に生まれた俺は、神から授かる能力『ギフト』の中でも『はずれギフト』と呼ばれるものを獲得してしまったせいで、村人たちから蔑まれる毎日。

しかし実は俺のギフト《ナビ》は、異世界に関するあらゆる情報を教えてくれる心の声を相棒にできるという、規格外の力だった！

それを知っていた俺は、十歳になると家を出て旅に発った。

転生特典でステータスもチート級だったため、旅先でトラブルに巻き込まれても問題はない。

魔物の群れを討伐したり、人間とノームのハーフで奴隷だった女の子——ポビイや、今はお世話になった宿屋『木漏れ日亭』に預けられつつ、世界中を自由に飛び回っている神獣のスノウを仲間にしたたり、なんだかんだ充実した日々を送っている。

本音を言えば、もっと平穩に異世界を回りたんだけどね……。

「ポピイ、そっちに行つたぞ」

「はいっ、お任せくださいです！」

故郷のラトス村から西にある街バルトスを出て早三日、俺とポピイは自由の天地を思い切り駆け回って、魔物たちと遊んでいた。いや、魔物たちからすればいい迷惑めいわくなんだけれどね……。

「よし、今日は山菜とボア肉のスープにボア肉サンドイッチだ」

「おお、毎日がご馳走ちそうですね、トーマ様」

「ああ、食べるのも修業のうちってな。だが、そろそろパンがなくなってきた。どこかの村か街に買いに行かないとな」

「ちよつと地図を見てみるです。ええつと……ここから西南の方向にエプラってところがあるです。村か街かは分かりませんが、そこが一番近いです」

「そうか、よし、明日はそのエプラに行ってみよう。さあ、野営の準備をするぞ」

野営と言っても、石と薪たきぎを集めてきて、たき火と調理兼用のかまどを作るだけである。寝る時は、たき火のそばで毛布をかぶって交代で寝る。

薪が必要のため、俺たちは森からあまり離られない。森の近くは、獣や魔物に襲われる危険はあるが、それはもとよりリスク計算の中に入っている。見張りさえしっかりしていれば、よほどの魔物でない限り、俺たちがやられることはない。

本当はキャンプ道具が欲しいんだよ。特に冬場はテントや寝袋が欲しい。でも、この世界のキャ

ンプ道具は重いんだよ。重いし、かさばるし、子供が背負って旅をするのはとうてい無理だ。

ああ、早く収納魔法を覚えたい。まずは、無属性魔法初級のストレージがいい。荷物を背負わなくていいようにしたい。そんなことを考えていると、ナジが頭の中に話しかけてきた。

『属性魔法はあれだけ早く習得したのに、無属性空間魔法が習得できないのは不思議ですね。結果魔法はすぐにできたのに』

（いや、理由は分かっているんだ。あんな、「空間」は分かるぞ。だが、「亜空間あくうかん」が分からないんだ。イメージできないんだよ。空間をただ囲うだけだったらできる。ほら、こうして結果で囲めばいいだけだ。だけど、この空間の外にある空間って何だよ……）

『我々がいるこの空間が、二次元平面上にあるとすれば、その外側にあるのが亜空間です』

（いや、だから、それって四次元じゃん。次元が一つ上ってことじゃん。そんなの、どうやってイメージしろって言うんだ？）

『……座標を一つ増やす、これはイメージできますか？』

（座標を増やす？ つまり、空間を指定する三つの座標に、もう一つ座標を加えるということか？）『そうです。この座標は、時間と空間を内包する変動パラメーターとして扱われますが、この世界と亜空間の境界に固定することで、二つの空間をつなぐことができます』

（言っていることは何となく分かるが、どんな風にイメージすればいいのか、分からない）

『この座標点はこちらの世界では、三次元の球体になりますから、適当な大きさの黒い球をイメージすれば良いでしょう。そして、その球につながる空間を指定してください』

(分かった。ちょっとやってみる)

俺はナビの言ったことを反芻しながら、まず、十メートルの三乗の大きさの立方体の空間をイメージし、次にそれに半分埋もれた黒い球体をイメージに付け加えた。そして、魔力を放出した。うおおおつ、体から一気に力が抜けていったぞ。大丈夫か、俺の体？

『大量の魔力を放出した際、一時的に体は弱体化しますが、すぐに魔力は回復しますから心配ありません。それより、見てください、成功しましたよ。これは〈ストレージ〉より明らかに容量が大きな〈ルーム〉の魔法ですね。おめでとございませす、マスター。この〈ルーム〉は、ストレージのように一時的な収納空間ではなく、ステータスに座標数値を適当に登録すれば、永続的に利用できますよ』

俺は、右前の空間に浮かぶ直径二十センチほどの「黒い球体」を見つめながら、何か現実とは思えないような感覚になっていた。

(ステータスに登録つて、どうすればできるんだ?)

『ステータス画面を出してください』

俺は「自分のステータス」と心の中で唱えた。目の前に薄い水色の半透明の画面が浮かび上がる。『無属性魔法に視点を集中して開けとか、オープンとか命じてください。そうすると、スキルとここに〈ルーム〉という表記があるはずだす』

(おお、あるな)

『さらにその〈ルーム〉に視点を集中して、開けとかオープンとか、心の中で命じてください。そ

うすれば、詳細画面が現れると思いますので、あとは、その座標に適当な数字を入れるだけです』
(分かった。……「オープン」)

言われたとおりにやってみる。おお、こんな機能があったのか。スキルの詳細画面が重なるようにして現れた。この空欄に数値を入れるんだな。

ええつと、容量は、千立方メートル……座標は、ゼロから始めればいいかな……立方体だから、八つの座標点に一边が十メートルになるように数値を入れてやる。

(なあ、ナビ、 $\sqrt{\text{ト}}$ とか使っていないのか?)

『はい、まったく問題ありません』

よし、できた。これで、〈ルーム〉と唱えれば、いつでも、この黒い球が現れるんだな。

「トーマ様、薪を集めてきました」

「ああ、そうだった。すまん、ポピイ、ちょっと魔法の練習をしていたら、かまどを作るのをすっかり忘れていた。すぐ作るからな」

「あ、お手伝いしま……な、何ですか、それっ? ト、トーマ様」

まあ、驚くよな。

「これ、何だと思う?」

「や、闇の精霊? 新種の空飛ぶスライム?」

「なるほど、確かに真つ黒だから、闇の精霊はありそうだな。ふふん、実はな、これはこういう

ものなんだ」

俺は自分のメイスを、その黒い球体の中に突っ込んだ。メイスは何の抵抗もなく、球体に呑み込まれ、ポピイは目を丸くして言葉を失った。

そこで、今度は球体に手を突っ込み、ポピイに分かるように「メイス」と声に出した。手を引き抜くと、俺の手にはメイスが握られていた。

「分かったか？ 俺はついに収納魔法を習得したんだ」

「す、すごいですっ！ トーマ様は天才です、神様です！」

「ふっふっふっ、もっと褒めたまえ。これで俺たちは重い荷物を背負わなくてもいいんだ。どうだ？ 嬉しいか？」

「はいっ、夢みたいですよ！ わ、わたしも入れてみていいですか？」

（ああ、どうなんだろう。ナビ、俺以外の者が物を入れても使えるのか？）

『はい、入れることはできますが、取り出せるのはマスターだけです』

「ああ、やっぱりそうか。ポピイ、入れることはできるが、取り出せるのは俺だけなんだ」

「あ、そうなんですね。分かりました。じゃあ、何かをしまいたい時には、トーマ様お願いしますね。ところで、それ、どれくらい入るんですか？」

「そうだな、小さい家なら一軒丸ごと入るくらいだな。鍛錬して魔力を強くできれば、もっと大きく広げることができるぞ」

「びっくりです……トーマ様って、ほんとにすごい人ですね」

まあ、俺がすごいんじゃない、ナビがすごいんだけどね。



翌朝、目を覚ました俺たちは、最後のパンでサンドイッチを作って食べ、すぐに出発の準備を始めた。

「なんだか雨が降りそうな空ですね？」

たき火の火を消しながら、ポピイが空を見上げて言った。

「そうだな。早いとこエブラだったか、そこへ行くことにしよう」

俺は、荷物をすべてへルムにしまい込みながら答えた。

空が晴れていようが曇っていようが、街道から外れた草原の中を行く俺たちは元気いっぱいだった。何しろ、昨日までの重い荷物を、もう背負わなくていいのである。

歩こう、歩こう、俺たち元気〜♪

俺がついつい口ずさんでいたら、ポピイが面白がって、自分にも教えてくれという。

そこで、「どンドン行こう」のところまで教えて、それを二人で繰り返しながら、能天気な歩いていた。

「おお、見えてきたぞ、あれだな」

二つの分かれ道をいずれも左の方へしばらく行くと、遠くに石の城壁が見えてきた。

2 エプラの街1

エプラの街は、アウグスト王国の南、プラド王国との国境を守るペイルトン辺境伯領への入り口の街だった。北門の前に並ぶのは商人の馬車が多いが、がたいが良い人、おそろいの装備を身につけた人なども結構いる。冒険者というより、傭兵のような印象だ。

「おい、聞いたか？ また国境付近で、プラド王国ともめごとが起きたらしい」

「またかよ……どうせまたエルプラド鉱山の権利をめぐる争いだろう？」

俺たちの前に並んだ商人風の男たちが、馬車の後ろでそんな話をしていた。

「ああ、ミスリル鉱山だからな。昔の戦争のごたごたが原因らしいから、簡単には解決しないだろうな」

な、なんと、ミスリルですと？ やはりあったのか、異世界金属。そうすると、オリハルコンとかヒビロカネとかもあるのか？ あるのか？ ……。

いつもなら、すぐに答えをくれるナビが、なぜか沈黙している。こういう時は、質問しても曖昧にはぐらかされてしまう。まあ、何か意図があるのだろう。聞かないでおこう。

「トーマ様、わたしたちの番ですよ」

「お、おう、じゃあパンを買いに行くか」

エプラの街は予想以上に賑わっていた。鉱山の街エルプラドへ行く人々なのだろう。

俺たちは露店でポム——リンゴに似た果実——のジュースを買い、店主のおばさんに市場の場所を聞いた。

「いいか、ポピイ、こういう街は他所から来た連中で活気づいているが、逆にそういう連中を狙った犯罪も多いのが常識だ。特に、スリとか……」

「よお、お前ら、この街は初めてか？ 兄妹……でもなさそうだな。親はいるのか？」

俺がポピイに注意を促しているところに、さっそくガラの悪そうな三人連れの男たちが行く手に立ちふさがった。

な、こういう連中が多いんだよ。

「親はいますよ。すみませんが通してもらえませんか？」

「まあ、まあ、何も怖がらなくていいぜ、へへ……金欲しくないか？ 俺たちが良い仕事を世話してやるからよ。な、行こうぜ？ 痛い目に遭いたくないだろう、ん？」

一人の男がそう言っつて、笑顔の下から凄んでみせ、あとの二人が俺たちの背後から肩を押すようにして、どこかへ連れていこうとする。

おいおい、白昼堂々と人込みの中で子供を誘拐しようつてのか？ とんでもない連中だな。大方、この街の犯罪組織の組員なのだろう。周囲では大勢の人たちが見ているが、誰も助けようとしな

こんな状況では、普通の子供だったら簡単に組織の餌食になって、奴隷に売られたり、犯罪の片棒を担ぐ一員に育てられたりするのだろう。

だが、あいにくだったな。俺たちは、普通の子供じゃないんだよ。

「俺、一応、Bランクの冒険者なだけど。おじさんたち、悪人のようだからやつつけていいよね？」

「はあ？ おいおい、何の冗談だ？ おめえみたいなガキがBランク冒険者だあ？ がははは……笑わせてくれるぜ」

俺はポビイと目を合わせて小さく頷き合った。

「殺さず、生け捕りだ」

「了解です」

「なにごちゃごちゃ言ってるやがるんだよ、さつさと来やがっ……うおっ、ぐああっ！」

俺の肩をつかんできた奴の手首を両手でつかみ、体を横にひねりながら足をかけた。男は見事に地面に転がり、手首がボキッと嫌な音を立てて、変な方向に曲がった。たぶん、折れたか、脱臼したのだろう。

ポビイも俺と同時に、するりと男の股間から背後に抜け出し、腰からダガーナイフを引き抜いて男の膝の裏を斬りつけた。

「ぎゃああっ！ あ、あ、足がああ……」

「なっ！ き、貴様らああっ」

残った男がナイフを抜いて、ポビイに飛びかかっていった。恐らく弱いと判断したのか、捕まえて人質にでもしようと思ったのか。馬鹿の考えは分からんけど。

ポビイは素早くその場で跳躍すると、その勢いで男の顎を思い切り蹴り上げた。折れた歯と血が口から飛び散り、男はそのまま地面に仰向けに倒れた。

「す、すげえ、あつという間に三人を倒したぞ」

「な、何だ、あの子たちは？ だが、ボラッド商会の奴らだろ、あれ……ヤバいんじゃない？」
周囲にできた人だから、驚きの声とともに心配そうな声も聞こえてきた。

「どけえっ、ほら、道をあけろっ……」

群衆の向こうから怒鳴り声が聞こえ、ガシャガシャと鎧がこすれる音が聞こえてきた。

現れたのはこの街の衛兵たちである。誰かが警邏の衛兵に伝えてくれたのだろう。二人の衛兵が、男たちをロープで縛っている俺たちのもとに近づいてきた。

「武器を捨てろ。手を上げて立てっ」

おいおい、えらく若い声と見かけたが、見習いか？ この状況をよく見るよ。

「待て、アレク、状況をよく見る」

おお、今度は渋い声のおっさんだな。さすがベテラン。

「は、はっ。で、ですが、これはあまりにも不自然な状況だと……」

まあね。いかつい男三人が子供にロープで縛られ、そのうちの二人が、痛みにヒュー泣いているんだから、確かに怪しい状況ではある。

「これは、お前たちがやったのか？」

ベテランの衛兵が、黙って見つめている俺たちに尋ねた。

「はい、そうです。いきなり声をかけてきて、どこかへ連れていこうとしたので、抵抗した結果、こうなりました」

「ふむ……誰か、今のこの少年の言葉を証明してくれる者はいるか？」

ベテラン衛兵は、周囲の群衆を見回して問いかけた。

野次馬たちは関わり合いになりたくないのか、そそくさとその場から去っていったが、二、三人の男女が残って、俺の言葉通りだと証言してくれた。

ありがたい、善き市民たちよ。

「どうやら、本当らしいな。よし、詳しい話を聞きたいので詰所まで来てくれ」

ああ、やっぱり面倒臭いことになるのね。まあ、仕方ないか……。

ベテランの衛兵に連れられて、衛兵隊の官舎まで連れていかれた。若い衛兵は、応援が来るまで、ごろつきたちを見張るために残った。



「……ふむ、話は分かった。奴らはこの街に巣食うゴミどもだ。おかげで、奴らの親玉を追い詰める手がかりになるかもしれん。感謝する」

ベテランの衛兵さんは、なんと副隊長さんでした。兜を脱いだおっさんは、濃い茶髪を短く刈り込み、太い眉、顎髭、頬から額にかけて傷跡があるいかつい顔だったが、その茶色の目は、人懐っこい感じの優しい目だった。

「さて、すまんが、お前さんたちが本当に冒険者なのか裏付けを取る必要があるんだ。今から一緒に冒険者ギルドまで付き合ってくれんか？」

「はあ、やっぱりギルドカードだけじゃ信じてもらえませんか」

「まあ、大人ならそれで済ませるが、二人とも俺の息子と同じくらいの年だからな。三人のヤクザ者を倒すなんて、普通に考えてありえん話だ。まあ、もう一つには、優秀な冒険者はチェックしておくようにとの、上からの命令もあるからな。すまん」

まあ、仕方ないので、俺たちはおっさんと一緒にこの街の冒険者ギルドへ向かった。

ギルドに入ったら、いきなりギルドマスターの部屋に連れていかれたのには、少々びびったが。

「よお、ベインズ、忙しいところにすまん」

「ああ、何を今更……。で、今日はどんな厄介事を持ってきたんだ？」

「あははは……手厳しいな。だが、今日は久々に良い知らせだぞ」

副隊長のおっさんは、俺たちをソファに座らせると、さっそく市場通りでの出来事を熱心に語り出した。

ベインズと呼ばれたギルドマスターは、四十半ばぐらいで、金髪をオールバックにして、細いス

トライプのグレーのスーツをびしっと着た、ちよい悪ダンディだった。

彼はおっさんの話を聞きながら、時折、そのとび色の鋭い目すまじで俺とポピイを見ていた。

「……ほお、なるほど……で、この二人がそいつらを倒した小さな英雄様すまじってことだな？」

ギルマスは、テーブルに置かれた俺たちのギルドカードを手に取った。

「ああ、そのギルドカードは本物だが、どこかの冒険者のものかもしれないからな」

また、このパターンかよ。はああ、いい加減うんざりだな。

「いや、間違いないよ。トーマにポピイ、パルトス支部から連絡が来ている。十一歳で異例のBランク昇格、有望な冒険者だから、手助けするようにとな」

「おお、そうか。うむ……なあ、ベインズ、例の件、こいつらに依頼するってのはどうだ？」

「やっぱり、そのことがあってわざわざ連れてきたんだな？」

ん？ 何か変な方向に話が進んでいるぞ。これは面倒ごとの匂いがある、全力で回避だな。

「あのう、お話の途中ですみませんが、俺たちもう帰っていいですか？」

俺の言葉に、おっさんとギルマスはじっと俺を見つめていたが、やがて、おっさんが口を開いた。

「お前たちを見込んで、一つ頼みがあるんだ。話を聞いてくれないか」

ほらきた。いや、聞きませんよ、あーあー、聞こえない。

3 エプリアの街2

「いや、すみませんが、俺たち王都に向かう旅の途中なんです。この街にはパンを買いに立ち寄りただけなんで……」

「な……そ、そうか……」

おっさんはがつくりと肩を落とし、うなだれた。

「ダルトン、あきらめろ。それに、こんな子供じゃ依頼をこなすのは難しいだろう」

おっさんの名はダルトンっていうのか。ちよつと言いはむかつくが、まあ、ギルマスの言う通り、あきらめてくれ。

「ああ。だが、子供相手ならライナス様も話しやすいんじゃないかと思ってな。大人は信用されていないし……はああ……」

その時、ナジが話しかけてきた。

『マスター、話だけでも聞いてみては？』

(ええっ、嫌だよ。絶対面倒事じゃん)

『これも、この世界を知るための修業ですよ。私がアドバイスをしますので』

ううん、やっぱりナジは俺を厄介事に導いている気がしてならないんだが……まあ、確かに逃げ回っているだけの旅も、情けないと言えば情けないがな。

「あの、ええっと、話だけなら聞いてもいいですよ。依頼を受けるかどうかは分かりませんが」

「おお、そうか。ただ、この話は外には出せない話でな。依頼を受けるにしても受けられないにしても、口外しないように頼む」

「はい、分かりました」

おっさん、じゃない、ダルトンさんは、まずこの依頼がすでに三回失敗に終わっていることを明かした。

「……実は、この依頼は俺がギルドに出したことになっているが、本当は辺境伯様からのじきじきの依頼なんだよ。それだけにもう失敗はしたくない」

「依頼の内容を聞いていいですか？」

「ああ、すまん、そうだったな……依頼というのは、この街の領主、ライナス・ペイルトン様のことなんだ……」

ダルトンさんの話を要約するとこんな感じだ。

この街の領主は、ペイルトン辺境伯の次男で準男爵のライナス様だ。まだ十五歳だが、独立するにあたり、国王から準男爵を下賜され、このエプラの街と近隣の二つの村を父親から分け与えられた。

もともと、この領主は辺境伯家の寄子貴族の一人、ポードッド子爵だった。しかし、彼はいわゆる腐敗貴族で、今も街に巢食っているごろつきたちと結託し、やりたい放題の不正を働いて私腹を肥やした。

さすがに数年経った頃には、辺境伯も子爵の不正に気づき、何度も呼びつけて詰問したり、証拠を握ろうと密偵を差し向けたりしたが、なかなか尻尾をつかむことができなかった。

結局、最後は勇敢な若い文官の命がけの内部告発によって、不正の証拠が手に入り、子爵を始め、関わった者たちは極刑を受けることになった。

今でも、古くから街に住む人たちは当時の酷い悪政のことを覚えていて、新しい領主にも信頼を抱いていない。おまけに、当時の生き残りであるごろつきたちが暗躍している。

その結果、ライナス様は街を治める自信を失くし、領政はもっぱら配下の者たちに任せて、屋敷に引きこもっているらしい。

「……それでもなあ、最初のうちはライナス様も一生懸命街を立て直そうと、自分から街に出向いて、領民たちに語りかけていたんだよ。だが、そのたびに、心無い言葉を浴びせられてなあ、側で見ている方が辛かった……」

「父上の辺境伯様は、手助けされなかったのですか？」

俺の問いに、ダルトンさんは小さく首を振って言いにくそうに声をひそめた。

「それなんだが……ライナス様は、辺境伯様の側室の御子なんだよ。正室には長男のケイン様と妹のカーラ様がおられる。侯爵家の娘である正室は、どうしても身分の低い貴族の出である側室に辛

く当たられることが多い。辺境伯様も表立って援助がしにくい状況でな……」

「勝手ですね。子供を産むだけ産ませといて、あとは勝手にしろですか」

「ああ、この街を任されたのも、言うならば失政の尻拭いだしな……だが、それが貴族の世界という奴なんだよ」

うん、胸糞悪い。貴族なんかに生まれなくて良かった。

「それで、依頼の内容とは？」

「うむ。辺境伯様は、もしライナス様がエプラの街のためになる大きな功績を上げれば、街の人たちもライナス様を信頼するようになるとお考えだ」

「まあ、確かに……例えば、どんなことがありますか？」

「ああ、それがな……魔物退治一回、街の浄化を二回やったんだが、どれも失敗さ」

「魔物退治は分かりますが、街の浄化って、いったい……」

「ああ、いわゆる悪者退治って奴さ。ほら、さっきお前さんたちが捕まえたクズども、奴らはボラッド商会っていう表向き商人とつながっている連中だな。このボラッド商会が金を、もう一人、裏の組織を牛耳っているアンカスって奴が人を集めて、この街を裏から操っているんだ。奴らは金になるなら、人殺し、誘拐、奴隷商い、魔薬販売、何でもやる連中だ。俺たちも何とか奴らの尻尾をつかみたいと頑張ってはいるんだが、なかなかつかめなくてな」

「つまり、ライナス様に魔物退治か、悪人退治をさせる手伝いをする、というのが依頼内容なのですね？」

「そういうことだ。どうだ、やってくれないか？」

うくん、やるとするなら悪人退治だな。証拠なんていらぬ。関係者全員、再起不能にすればいいだけだ。まあ、後始末は大変だろうけど、知ったことではない。

だがなあ、やつば面倒臭いしなあ。まあ、ライナスさんには立ち直ってもらいたいけどさ。

「……すみませんが、明日まで返事を待ってもらえますか？」

「おお、いつまでも待つぜ。一日二日どうなる問題でもないしな」

結局、俺たちはこの街に一泊することになってしまった。

「ああ、腹減ったな。もう、昼を過ぎてるじゃないか」

「お腹すいたです」

「よし、まだパンを仕入れてないし、もう一回市場へ行って、何か食うか」

そんなわけで、俺たちは再び市場へ行き、まずパンや野菜を一週間分買って、誰も見ていない路地の裏でへルムに収納した。

その後、屋台を回って適当に昼食を摂ったのだが、人通りは多くて一見活気はあるものの、よく見ると、店の人たちの顔にはあまり精気が感じられない。

たぶん、税金以外に金を巻き上げられているのだろう。どこの世界も結局は同じだ。一握りの連中を豊かにするために、その他大勢の人間があくせく働いて金を貢いでいる。

俺の腹の中に、なんとも不快な苦い塊のようなものが生まれて、どんなにため息を吐いても外

に出ていかなかった。

4 やると決めたら手は抜かない

俺たちは宿を探したが、安い宿はどこも満室だったので、少し高かったが、冒険者ギルドからほど近い宿屋に二人部屋を借りた。

「どうしようか？ ポピイの意見は？」

夕食は部屋の中で摂ることにした俺とポピイはテーブルを挟んで話し合った。

「わたしは受けてもいいかなと思いましたが。ライナス様がお可哀そうに思いました」

「うん、確かに十五歳で前の領主の尻拭いをさせられるのは、可哀そうだよな。よし、じゃあ、この依頼を受けることにする。さて、そうになると、魔物討伐と街の悪人退治のどちらにするかだ
が……」

「魔物討伐が簡単そうですが、領主様の手柄となると、よほどの大物じゃないと皆から認められない気がします」

「うん、そうだな。それに、町や村を襲う魔物じゃないなら、街の人からすれば関係ない話だもん

な。まあ、そんな魔物がいるかもしれないから、一応明日ギルドで聞いてみることにしよう。となると、やっぱり手っ取り早いのは悪人退治の方か」

「はい。わたしの気持ちとしては、そっちをやりたいです」

「うん、俺も同じ気持ちだ。よし、じゃあ悪人退治をする。まずは、何からやるべきか、ポピイ、分かるか？」

ポピイは、じつと下を見て考えていたが、やがて顔を上げて言った。

「悪人がどこにいるか、どんな奴がいるか、どのくらいの人数いるか、などを調べることですか？」

「うん、正解だ。つまり情報を集めることだな。ここで勝負は決まる。できるだけたくさん、ためになる情報を集めることが一番大切だ」

「はい、分かります」

「明日、そのやり方をダルトンさんと打ち合わせるぞ。あとは、役割分担を決めて、動く」

「了解です」

話を終えた俺たちは、夕食を摂ることにした。屋台で買った肉の串焼きや、野菜の煮込みスープ、揚げパンなどをテーブルに並べて適当につまみ始めた。

「ポピイ、お前に隠していたことがある……」

俺はふと思いついて、ポピイに言った。

「は、はい、たぶん、トーマ様には、わたしの知らないことがたくさんあると思います」

「う、うん、いや、そんなにたくさんはないぞ。まあ、それは置いといて、今回の仕事に関わるこ

とだから言っておく。俺は〈鑑定〉というスキルを持っている。分かるか？」

「かんでい……？ いいえ、分かりません」

「うん。例えばな、この串焼きが何の肉で、どんな栄養があるのか、とかいう情報が目の前に浮かんでくるんだ」

「すごいです！ そんなスキルがあるんですね？」

「ああ、すごいスキルなんだ。ポピイに最初に会った時、お前が《暗殺者》というギフトを持っていることも分かった」

ポピイは少し恥ずかしそうに赤くなって、俺から目を逸らした。

「まあ、これから悪人たちの情報を集めるんだが、俺にはそんなスキルがあることは知っておいてくれ」

「は、はい、分かりました」

ポピイは俺がいったい何者だろうって思っているだろうな。

いつか、俺の秘密を話せる日が来たら教えてやろう。



翌日の朝、宿の朝食を食べてから、俺たちは衛兵の官舎へ向かった。

門番さんに怪訝な顔をされたが、ダルトンさんの名前を出すと、すぐに中に通してくれた。

「おお、よく来てくれた。もう朝飯は食ったのか？」

「はい、食べました。あ、ダルトンさん、まだならどうぞ。俺たち外で待っています」

「いや、構わんよ。今、お茶を淹れるからその辺りに座ってくれ。散らかっていてもまんな」

ダルトンさんはやつと着替えを済ませたところだったらしい。専用の部屋の中は、あちこちに書類やら道具やらが散らばって、雑然としていた。

お茶を淹れて持ってきたダルトンさんは、俺たちの前にカップを置いてから、向かい側のソファに座った。

「結論が出たようだな？」

「はい。俺たちで良ければ、依頼を受けたと思います」

ダルトンさんは、いかにも嬉しそうに髭面をほころばせた。

「そうか。まずは礼を言う。ありがとう」

「いいえ。俺たちはあくまでも冒険者ですから、ちゃんと報酬をいただければ仕事はやりませう。それで、仕事に入る前に確認しておきたいことがいくつかあるのですが、いいですか？」

「ああ、何でも聞いてくれ」

俺はメモ用紙と炭筆を取り出してから、質問を始めた。

「まず、一つ目ですが、俺たちは敵についての情報収集から始めたいと思っています。そこで、今のところ分かっていることを教えてほしいんです。敵のアジト、おおよその人数、注意すべき相手、こちらに協力してくれそうな人、とりあえずこのくらいですな」

ダルトンさんは、驚いたような顔をしてからニヤリと笑った。

「なるほど、その年でBランクになるはずだ。頭が切れるな。ふふ……分かった、順番に答えよう。まず、アジトだが、一つはボラッド商会だ。ボスはルイス・ボラッド、前の領主とともに死刑になったジャン・ロゴスの手下だった男だが、上手く罪を逃れて、三年前から頭角を現してきた。二つ目のアジトは、確証はないが、『恋する子猫ちゃん』という酒場兼娼館だ。このボスは、アンカスという名の男だが、ほとんど外に出てこないで、どんな男かはよく分かっている。裏の世界で暗躍する組織のボスだ。ルイス・ボラッドとつながっていて、奴の手足と言っている。人数だが、表でいろいろやっている連中が五、六十人、幹部やめつたに表に出てこない連中が二、三十人ざつと百人足らずくらいだと考えていいだろう。あと、注意すべき相手はつかめていない。協力者だが、残念ながない。まあ、その都度手下たちを痛めつけて、情報を吐かせているが、めばしい成果は上がっていない。今のところ、このくらいだな」

「なるほど、分かりました。次の質問ですが……俺の考えた作戦では、最終的に敵との戦争になります。こちらの兵力はどれくらい見込めますか？」

その問いに、ダルトンさんは途端に苦虫を噛み潰した表情になった。

「ああ、その質問が一番きついな。実は、今この領地では隣国のプラド王国と鉦山をめぐる小競り合いが続いていてな。隊長も十二人の衛兵を連れて、領都バランダの治安維持の応援に出ているんだ。高ランクの冒険者や傭兵たちも国境の砦に雇われている。つまり戦力は衛兵が二十五人、あとはCランク以下の冒険者、質の悪い傭兵くらいしか街に残っていない現状なんだ」

うわあ、最悪の時期じゃん。どうすんのこれ……いや、待て……ということとは、逆に相手も油断している可能性が高いよね、うん。

「分かりました。ええっと、では、次に、俺が考えた作戦ですが……」

「ちよつと待て。おい、今から領主様のところへ行くぞ。せつかくなら、領主様にも聞いていただく方が良さだろう」

えっ、急に困るんですけど……でもまあ、しかたないか。今回の主役は領主のライナス様だからな。

5 領主館にて

俺たちはダルトンさんに連れられて、エプラの領主ライナス・ペイルトン準男爵の屋敷に向かった。

着いてみてびっくりした。ここは要塞か？ けっこう大きくて武骨な屋敷だ。周囲は三メートルほどの厚い石壁で囲まれ、山城のような頑丈な石造りの建物がいくつも組み合わさって一つの屋敷になっている。前任のなんとか子爵は、戦争でも想定していたのだろうか。

門の前には二人の番人がいたが、どちらもまだ若く、鎧のサイズも合っていないように見えた。ダルトンさんがその二人に、主人に会いたい旨を告げると、片方の門番がガシャガシャと鎧の音を響かせながら、屋敷の方へ走っていった。

やがて、屋敷の方から背の高い、執事らしき青年が近づいてきた。

「ダルトン殿、よくおいでくださいました。ええっと、そちらの少年少女は？」

「エリ阿斯殿、突然伺って申し訳ない。ライナス様に急用でな。この子たちは旅の冒険者だ。驚くなかれ、Bランクの冒険者だよ」

「Bランク！ ……それは、すごいというか、にわかには信じられませんが……ダルトン殿のお連れなら間違いはないでしょう。どうぞ、お入りください」

俺たちは執事の青年に案内されて、その昔のような屋敷の中に入ってしまった。

「この部屋で少々お待ちください」

案内されたのは豪華なソファとテーブル、シャンデリア以外は何も無いような、だだっ広い部屋だった。

「見ただろう？ この館は戦を前提に造られた。前の領主のボーデッドが大金をつぎ込んで造らせたんだ。今、残っている家具も奴が残したものだ。市民の血税をこんなものに使っていたのさ」

「よほど何かに怯えていたんでしょね。怯えながら贅沢するって、何が面白いのか分かりませんが……」

「あはは……確かにな」

ダルトンさんと話していると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

入ってきたのは、金髪に水色の瞳、はかなげで一見少女と見まごうような、細い体の少年だった。その後ろから、お茶やお菓子を載せたキャスター付きの台車を押して、執事のエリ阿斯さんが入ってくる。この館には、女性のメイドはいないのだろうか？

ダルトンさんが立ち上がって頭を下げたので、俺たちもそれに倣った。

「また、あなたですか……お気持ちはありがたいですが、もういい加減にあきらめてください」
少年領主は、やはり女の子のような高い声でそう言った。

「はっ、面目次第もございません。私めの力が足りないばかりに……どうかお許しください。しかし、今回は自信がございます。どうか、話をお聞きください」

「そのセリフも毎回聞いている気がします……はあ、分かりました、お話だけはお聞きしましょう。で、その子たちは？」

ライナス様はソファに座ったがダルトンさんはまだ立ったままだったので、俺たちも立っていた。「はっ、この子たちこそ、今回ライナス様に紹介したい者たちでして……トーマたち、自己紹介を頼む」

「あ、はい。どうも初めてお目にかかります、トーマと言います。冒険者しながら旅をしています。現在のランクはBランクです」

俺は自分の紹介を終えると、ポピイに目配せをした。ポピイ、緊張してるな。嘸むなよ。



「はは、はじめまして、ポ、ポピイなのです。ト、トーマ様と一緒に旅をしまっしゅ。よ、よろよろしくお願いします」

「ぬみまくったな。まあご愛嬌あいきょうだろう、と思っていたら、ライナス様がいきなりプツと噴き出して、お腹を押さえ始めた。

「よ、よろよろって、あははは……」

「なんだ、陰気な引きこもりだと思っていたら、そんな風に笑えるんだ。ちょっと安心した。

「俺はそんな少年領主を見ながら、泣きそうな顔のポピイの頭を撫なでてやった。

「ライナス様、そんなに笑ってはお客様に失礼ですよ。さあ、皆様どうぞお座りください」

「執事のエリアスさんが、そう言ってお茶とお菓子の器を並べていった。

「いや、失礼、ふふふ……とても可愛かったから、ついね。でも、その年でBランク冒険者なんてすごいね」

「はい、彼らのお話をお聞きになったら、もつと驚かれますよ」

「ダルトンさんがやたら俺たちのハードルを上げてくる。やめてよね。

「ポピイ、今度は顔真っ赤だぞ。ほら、お茶飲んで落ち着け。

「分かった。詳しい話を聞こう。どうぞ、お茶を飲みながらゆっくり説明してくれ」

「俺たちはお茶を飲みながら、先ほど衛兵官舎で話した内容をもう一度、おさらいするように話し始めた。

「ふむ……話は理解した。つまり、君たちが情報を集めて作戦を立てるから、最後の仕上げを僕やダルトンでやれってことだね？」

「はい、簡単に言うそうです」

ライナス様は少し驚いた様子で、目を大きく見開いた。

「君たちすごいね。僕よりずっと年下なのに、怖くはないのかい？」

「ああ、怖くないと言えはうそになります。でも、正直言うと面倒臭い方が強いですね。だから、後始末の方はお任せします」

「あ、あはは……分かったよ。これから、トーマとポピイって呼んでいいかい？ 僕のことはライナスと呼んでくれ」

「分かりました。では、ライナス様と呼ばせてもらいます」

ダルトンとエリアスはライナスの楽しげな様子に、思わず顔を見合わせて、にこりと微笑みを交わした。話し合いが終わり、ダルトンさんは俺たちを促して立ち上がった。

「では、ライナス様、準備が整ったらご連絡いたしますので、それまでしばらくお待ちください」

「うん、くれぐれも気をつけてくれ。危険だと判断したら、やめて良いんだからな」
俺とポピイはしっかりと頷いた。

「ダルトンさん、いったんここで別れましょう。一緒にいるところを見られるのは危険だ。連絡はギルドを仲介した方が良いと思います」

「おお、そうだな。では、私がギルドに行つてその旨をベインズに伝えるとしよう。これからは、連絡したいことがあれば、口頭でも文書でもベインズに伝えてくれ」

うん……本当は、ベインズさんも百パーセント信用しない方が良いんだけどね。

「分かりました。では、俺たちはこれから情報収集を始めます」

俺たちはダルトンさんと別れると、街の大通りに向かった。

「ポピイ、商業ギルドに行つてみよう」

「商業ギルドですか？ 何をするんです？」

「ボラッド商会と『恋する子猫ちゃん』の二つの店を探るために、何かいい仕事がないか探すんだ」

「なるほど、さすがトーマ様です」

うん、いや、まあ、こっそりナビからアドバイスをもらったんだけどね。

6 潜入捜査も楽ではありません1

商業ギルドの建物は、まるで高級ホテルといった雰囲気だった。どこの街でもそうらしいが、や

はり資金力の面で冒険者ギルドを圧倒しているのだろう。

場違い感が半端ないと思いがち、身なりの良い人々の間を抜けて、受付に向かった。

「あの、すみません」

三つある受付の中の人が並んでいないところに行つて、黒髪のきりつとした感じの受付嬢に声をかけた。

「はい、ようこそ当ギルドへ。何か御用ですか？」

相手が子供でも、ちゃんとお辞儀をして応対してくれる。最初の印象は良いぞ。

「ここは、仕事も紹介してもらえますか？」

「はい、もちろんですよ。この街は初めてですか？」

「はい。昨日来たばかりです」

「誰かの紹介とかはありますか？」

「ありません」

受付のお姉さんは、細い指を顎に当てて少し考えてからこう言った。

「そうですね。お店を紹介しても良いですが、まずは、あそこの掲示板にある短期のお仕事を、どれかやってみてはどうでしょうか？ いくつかやってみて、どんな仕事が自分に向いているのか分かってから、お店を探した方が良いでしょう」

「おお、なるほど、分かりました。ちょっと見てきます。あつ、そうだ、ギルドの会員手続きはいらないんですか？」

「あ、そうでした。すみません、私つたらうっかりして……ギルドで紹介しているお仕事は、会員でないといけないんですけど。すぐに手続きしますね。申請料が銀貨三枚必要ですが、よろしいですか？」

優秀そうなお姉さんだが、可愛いところもあった。俺は周囲から見えないように、カウンターと自分の間に素早く〈ヘルム〉を発動させて、中から銀貨六枚を取り出した。

「じゃあ、これ」

「はい、お二人分ですね。では、この用紙にお名前とアピールしたい特技やスキルがあれば、記入してください」

うーん、どうしようかな。何か一つぐらい書いておくか。

『マスターは算術堪能、力仕事得意くらいでどうですか？ ポピイさんは家事全般でどうでしょう？』

(うん、なるほど、いいね)

「ポピイ、特技は一応、家事全般でいいかい？」

「あ、はい、それでいいです」

俺は用紙に名前と特技を記入して、お姉さんに差し出した。

「はい、これで結構です。では、カードを作りますが、少々時間がかかりますので、その間に掲示板をご覧になってください。カードができたからお呼びしますね」

「はい、そうします。ありがとうございます」

俺たちはお姉さんにお礼を言っ、ホールの一面を覆う掲示板の方へ向かった。さてさて、どんな仕事があるのかな？

大きな掲示板には、ありとあらゆる短期の仕事依頼のビラがたくさん貼られていた。一応、カテゴリーごとに分けてあり、見やすかった。

おっ、これなんかいいんじゃないか？ 『ゴミの回収』。領政局が出している依頼だ。決められた区域を毎日一回、ゴミを集めて回るんだな。場所の指定とかできるんだらうか？

「トーマ様、こんなのがありましたです」

ポピイが何か見つけたらしく、一枚のビラを持ってきた。

「ん？ なになにに、接客係および雑用係それぞれ一名から二名……依頼主は、居酒屋『恋する子猫ちゃん』……っ！」

「つて、えええつ、なんとタイムリーな。しかし、接客業つて表向きで、裏ではアレだよな？ それはポピイにはさせられんぞ。雑用係ねえ、うくん、怪しさいっぱいだけど、内部を探るには絶好の仕事だよなあ……」

『店に直接聞いた方が良さかもしれません』

（ああ、そうだな）

ナビのアドバイスに従って、ポピイに告げる。

「一応これを持って行って、店に聞いてみよう。決めるのはその後だ」

「はい、分かりました」

「トーマ様、ポピイ様」

おっ、カードができたみたいだな。

俺たちはそれぞれのビラを持って受付に行き、お姉さん——名前はサーニアさんでした——からカードを受け取った。ビラを見たサーニアさんは少し心配そうだったが、短期雇用ということもあって、受付をしてくれた。

俺たちは商業ギルドから出ると、さつそく領政局へ向かった。

領政局はいかにもお役所つて感じのごつい建物だった。いざという時には、ここが街の人々の避難所になるのかもしれない。どでかいホールと中庭を囲んで、それぞれの部署の建物が建っている。

案内係のおじさんに聞いて、環境保全部という表示板がある部屋まで行き、ドアを開けた。

そのとたん、男臭い空気がむわっと漂ってきた。部屋の両側にはベンチ型の長椅子があり、数人の作業着の男たちが座ったり、寝転んだりしてだべっている。その奥には机があり、初老の男が事務仕事をしていた。

あ、これ、あれだな、工事現場とかにあるプレハブの事務所だな。

「ん？ 子供が、こんなところに何か用か？」

初老の男性が顔を上げて、入ってきた俺たちを怪訝そうに見ながら尋ねた。

「はい。商業ギルドでゴミ回収の仕事のチラシを見ってきました」

「は？ お前が？」

男の戸惑いの声に、そこにいる男たちの笑い声が重なった。

「何か、問題でも？」

「いや、問題も何も、お前には無理だろう？」

「うははは……おい、坊主、ゴミって言ってもな、紙屑だけじゃないんだぞ。それこそ、ありとあらゆるゴミを回収しなくちゃならないんだ。荷車一杯になったら、二百キロほどにもなるんだ。坊主にはどうして牽けやしないよ」

がたいの良い髭面のおっさんが、親切なのだろう、穏やかな口調で笑いながらそう言った。

「ああ、力のことですか？ 大丈夫ですよ。なんなら、おじさん、俺と腕相撲やってみますか？」
俺の言葉に、部屋の中の空気がいっぺんに冷え込んだ。

「はあ？ おい、坊主、大人をからかうんじゃないぞ。俺とお前の体を比べてみれば、分かるだろうが、いいかげんに……」

「やってみなければ分からないと思いますよ」

そう、実際やってみるまでは、相手を軽々しく判断してはいけないのだよ、おっさん。この世界は、ステータスとスキルがほぼすべてなのだ。それが、この世界の恐ろしさであり、面白さでもある。数値がそのまま現象として現れるのがこの世界なのだ。

俺は、当然〈鑑定〉でおっさんのステータスを確認していた。現在の俺の物理力は、わずかだがおっさんを超えている。

「むうう、よし、こうなったらその生意気な口をきけなくしてやる」

おっさんは、俺に煽られてまんまと乗せられてしまった。

(しかし、ゴミ回収するのに、なんでこんなことまでしなくちゃいけないんだ？ ほんと、面倒臭え)

おっさんが移動させたテーブルを挟んで、俺とおっさんが腕を載せて見つめ合う。

「ゲンクさん、十秒以上かかったら負けだぜ。一気にいけよ」

「よし、俺が審判をしてやる。いいか、お互い手を握って……始めっ！」

周囲のやんやの声の中で、俺とおっさんの勝負が始まった。

「うおおっ、な、なんだとおおっ！」

おっさんは一気に片を付けようと力を込めてきたが、俺はびくともしなかった。しかし、俺も手を抜ける状況ではない。負けはしないが、押し切れる気もしない。

なぜなら、ステータスでは俺が勝っているけど、体重で俺が圧倒的に負けているからだ。ステータスの差が体重差で相殺されている。

とにかく、おっさんや周囲の人たちが、俺を認めるまで頑張るしかない。

「おいおい、マジか？ ゲンク、お前本気出してるのか？」

「うおおあああ、ほ、本気、だ、よ。ぬううっぐううう」

「よし、だったら、そこまでだ」

机で仕事していた初老の男がそう言って、ストップをかけた。

「ハア、ハア……お前、すごいな、何をして鍛えた？」

「ええっと、小さい頃から走って、棒振って、魔物を倒しましたね。俺、辺境の村の出身です

から」

ゲンクのおっさんは、それを聞いてまた何か言おうとしたが、初老の男に遮られた。

「それくらい力があれば大丈夫だろう。よく来てくれた、歓迎する。実のところ、募集をかけても誰も来てくれなくて困っていたんだ。わしは、この部長をしておるクライブだ」

「トーマです。よろしくお願いします」

「さっそく明日から働いてもらうが、いいか？」

「はい、働くのは構いませんが、一つ条件があります」

「条件？」

俺はポピイを手招きして、怪訝な顔のクライブさんに言った。

「実は、妹がある店で働くことになりまして、兄として心配なので様子が見られるように、その店がある地区を担当させてもらいたいんです」

「そうか、妹がな……どこの店だ？」

「えっと……」

「こ、『恋する子猫ちゃん』なのです」

ポピイが告げると、男たちがざわめいた。

「な、おい、本当か？ あの店はな……その、なんだ、つまりだな……」

「あ、ええっと、接客じゃなくて、雑用係ですので、大丈夫です……と思います」
クライブさんを始め、男たちはほっとしたように息を吐いた。

「分かった。西5地区だな。俺の担当地区だが、替わってやる。だが、きつい場所だぞ、覚悟はしとけよ」

「はい、ありがとうございます」

こうして、俺はお役所の仕事をしながら、悪人のアジトを観察できることになった。ただし、ポピイがまだ例の店で働けるか決まっていないのに、ウソをついてしまったことは、反省しないといけない。

『ポピイさんには、最低限どこかの店で働いてもらえれば十分でしょう。危険も少ないですからね』

うん、まあ、確かにナビの言う通り俺だけでも捜査はできる。

とにかく、『恋する子猫ちゃん』という、ふざけた名前の店に行ってみることにしよう。

7 潜入捜査も楽ではありません2

領政局を出た俺たちは、そろそろ夕方の賑わいを見せ始めた街の大通りを抜け、裏通りの猥雑な雰囲気の中を歩いていった。

「ここか？　こりゃあ、表からは入れないな」

色とりどりの文字が躍る派手な看板と、男たちの叫び声に混じって聞こえてくる女たちの嬌声、酒と薬草の焦げるような匂い、それが辺り全体を覆っていた。そこが例の店、自称居酒屋『恋する子猫ちゃん』だった。

俺とポピイは、さすがに表のドアを開けて入る勇氣はなく、通りの裏側に回って悪臭の漂う店の裏に向かった。

ちようど店の裏と思われる場所に、酒のグラスを持って石段に座っている女がいた。酔いでも覚ましているのか、艶のない茶色の長い髪の間から見える顔は、やつれて生気を失っているように見えた。俺たちが近づいても、その女は気づかないのか、ぼおっと地面を見つめていた。

「あの、すみません」

俺が小さな声であいさつすると、女は初めて気づいたのか、ビクツと肩を震わせて、驚いたような顔をこちらに向けた。

「っ！　子供？　一体、こんなところになんたって子供が……」

「ああ、驚かせてすみません。俺たち商業ギルドの従業員募集のビラを見て来たんですけど、表からは入りにくくて……」

「ああ、そういうことか……でも、ここは子供が働くような店じゃないよ」

「はい、分かっています。でも、雑用係の募集もあつたので、この妹ができるんじゃないかと思つて」

「雑用係？」

女は怪訝そうに眉をひそめて、少し考えてから立ち上がった。

「ちよつと待つて。ママに聞いてくるから」

女はそう言うと、裏口から店の中に入つていった。

俺とポピイは待つ間、その狭い路地裏から、茜色に染まつていく空を何気なく見上げていた。

「何か、悲しい気持ちになりますね……」

「うん……こんなところで一生を終える人たちもいる。そう考えると、辛いこともあるけど、自由に旅ができる俺たちって、幸せなのかもな」

「はい、心の底から、そう思います」

短い期間でも奴隷になつた経験を持つポピイは、自由のありがたさを身にしみて感じたのだろう。ドアがガチャツと音を立て、俺たちは地上に目を戻した。

「ふうん、この子たちかしら？」

先ほどの女と一緒に出てきたのは、ひと目でそれと分かる、ごつい体格で背の高い、ドレスをまとつた人物だった。

その人物は、驚いて固まつた俺たちに顔を近づけ、しげしげと見回した。

「二人ともここで働きたいの？」

明らかに男の声でその人物が尋ねた。

「あ、いいえ、は、働きたいのは妹で、俺はゴミ回収の仕事をするになりました」

「ああら、田舎から出てきたのね？ 親はいないの？」

「は、はい」

「泣かせるじゃない……あたしにも、可愛い妹がいたのよ。病気で死んじゃったけどね……いいわ、妹ちゃんを雑用係に雇ってあげる。中に入って、契約書書くから」

おお、なんか雇ってもらえた。それに、割とまともな感じがするんだが、まあ油断は禁物だよな。店の中に入ると、そこは店から続く長い廊下の突き当たりの場所だった。右には食料倉庫なのか地下への階段があり、左には雑然としたキッチンがあった。廊下の途中には上の階に上がる階段がある。廊下の向こうからは明るい光が漏れ、例の騒がしい声が聞こえていた。

「あたしはアンジェリカ。店ではママと呼ばれているわ。この子はレニー、今体調を崩していてね。レニー、あんた、部屋に帰って寝てなさい」

「大丈夫よ、ママ。乗りがかった船よ、もうしばらく一緒にいさせて」

「しょうがない子ね。じゃあ、お茶とジュース、事務室に持ってきて」

「分かったわ」

レニーという女がキッチンの方へ去ると、アンジェリカは俺たちを二階へ連れていった。階段を上り終えると、まっすぐに廊下が続ぎ、左右にいくつかの部屋があった。右にも廊下があり、俺たちは右に曲がって突き当たりの部屋に通された。

「まあ、適当に座ってちょうだい。それで、名前は何と言うのかしら？」

「あ、はい、俺はトーマ、妹はポピイと言います」

「トーマちゃんにポピイちゃんね。ええつと、契約書は……あつたあつた。まず、やってもらう仕事だけど、さっきのレニーって子の体調が戻るまで、ここで働く女の子たちの身のお世話をやってほしいの。例えば、お洗濯とか、食事作りとか、お使いとかね。これまでレニーが一人やってきたから、少し無理をさせちゃったのよ」

「わ、分かりました。頑張りますです」

「あらあ、いい子ねえ」

アンジェリカはポピイにここにこしなから、契約書にさらさらと何かを書き込んだ。

「はい、確認して？ 期間はひとまず一週間にしたわ。部屋はレニーと一緒に部屋にするからいろいろと教えてもらいなさい」

俺は契約書を受け取ってしっかり目を通した。どこにも不審な条文はない。しかも、日給は二千ベニー、この世界の基準から見てもかなりの好待遇だった。

うーん、どう考えたらいいんだろう？ ここつて、裏のボス「アンカス」のアジトって見られている店だよな。やっぱり、雑用とか言つて、何か犯罪の手伝いをさせるとか……。

とにかく、契約自体には何も問題はない。俺は契約書にポピイの名前と、身元保証人の欄に自分の名前を書き入れてアンジェリカに返した。

「うん、ちゃんと字は書けるのね、偉いわ。オーケーよ。ポピイちゃんの荷物は大丈夫？」

「はい、少ないですからいつでも持ってこられますが……」

「だったら、すぐに持ってきなさいな。今夜からさっそく働いてもらうから」

そんなわけで、俺たちはいったん宿に帰り、ポピイの荷物をリュックに入れて、また店に戻った。「ポピイ、あんまり頑張りすぎるなよ。何か一つか二つ、情報が得られればいいんだから」

「はい、分かりました」

「それと、あのママさんやレニーさんはいい人みたいだけど、絶対信用しすぎないように。何か秘密があるのは確かなんだ。とにかく、自分の安全を最優先に、危険だと思ったら迷わず逃げるんだ」

「了解です」

店に戻る道すがら、俺はポピイに念を押して言い聞かせた。

とにもかくにも、こうして俺とポピイの情報収集活動は始まった。

いやあ、最初はここまでやるつもりはなかったんだけどね。アジトに突撃して、全員ぶん殴って、はい終わり、後始末はよろしくって、そんなつもりだったんだよ。

でも、そこで俺の臆病などころが出てしまったんだよね。ほら、万が一強い奴とかいて、命を落としたら馬鹿らしいじゃないか？ なにせ、俺のこの世界での最終目標は、「寿命まで生き延びる」だからさ。それに、ポピイも死なせたくないね。

だから、失敗しないようにと思ったたら、俺のこだわる性格が出てしまったわけですよ。面倒臭いけど、こればかりは自業自得だよな。

『良い勉強だと思っただ頑張りましょう、マスター』

はい……頑張ります。

8 開けてびびっくろ、ゴミ袋

「おい、小僧、こいつも片付けとけ」
「はあ」

早朝のボラッド商会の裏庭。大量に積まれたゴミを小さくし、分別して荷車に積んでいく。荷車の荷台には生ごみ用と不燃物用の大きな金属バケツが二つ置いてある。その空いたスペースに、麻ひもでくくった燃えるごみを放り込んでいく。終わったら、荷物の上からカバーの麻布を被せ、落ちないようにロープで縛る。

潜入捜査を始めて三日目、それなりの成果は上がっていた。

まず、ボラッド商会で働く者たちのおおかたは、〈鑑定〉でステータスを確認できた。中には危険なギフトやスキルを持つ者もいたが、それを活かしている者は見受けられなかった。面白いことに、《商人》とか《生産者》とか、まともなギフトはほとんどおらず、多くの者がいわゆるはずれギフトと、周囲から揶揄されたであろうギフトの持ち主だったことだ。

やはり、はずれギフトを持って生まれると、普通の場所では生きにくいんだろうな。

ただ、おかしいのが、ダルトンさんの話では、表で動いている人間は五、六十人くらいだということだったが、俺が記録した限りでは三十人足らずだ。店の内部にあと三十人もいる気配はない、『恋する子猫ちゃん』の従業員も、ポピイの話では十人足らずだ。

となると、どこか他にアジトがあるのか、あるいは……。

「おい、お前たち、何をぐずぐずしてる。早く店を開ける準備をしねえか」

「は、はい、ボス、すみません」

おっと、ボスのお出ました。珍しいな、こんな朝早く。こいつがボラッド商会の会長ルイス・ボラッドだ。四十代半ばくらいだろう、明るい茶髪をオールバックにして油できっちり固めている。

細面でいかにも神経質そうな顔だ。黒いシャツに襟がグレーの白いタキシードスーツを着ている。このまま地球に連れていっても、ギャングのボスで通用するだろう。

ちなみに、この世界の服装は、俺のいた世界でもほとんど違和感がない。もしかすると、こうした服装を流行らせたのも地球からの転移・転生者じゃないだろうか。

閑話休題。

奴が一瞬、俺に鋭い視線を向けたので、ドキッとしたが、すぐに背を向けて店の奥に去っていった。

（まさか、怪しまれなかったよな？ 〈鑑定〉使ったのはまずかったか？）

『いいえ、大丈夫です。彼は非常に神経質です。見知らぬ者には特に警戒の目を向けるのが習性の

ようですね』

ナビの言葉を聞いた俺がほっとして、荷車を牽いて去ろうとした時、三人の男たちが裏通りから何か箱を抱えて走ってきた。彼らは裏口から駆け込んでいき、姿を消した。

（何だろう？ えらく急いでいたが……）

気にはなったが、いつまでもここにいるわけにはいかない。仕事を早く終えないと。

早朝でまだ人通りの少ない道を、一軒一軒、ゴミを回収しながら荷車を牽いていく。

（これ、結構いいトレーニングになるぞ）

『はい。マスターに不足している物理力、跳躍力を高めるには、とても良いトレーニングです』
そんなのんきなことをナビと話しながら、やがて俺は『恋する子猫ちゃん』の店の近くまで来ていた。

いつものように、店の脇に荷車を置いて、裏口へ回るために路地裏へ入っていった。

と、その時、裏口の方から何か話し声が聞こえてきた。俺は気配を消して、裏口を覗き込んだ。

ええっ！ 思わず出かかった声を慌てて抑えて、物陰に隠れる。そこにいたのは何と、さつきボラッド商会の裏口に駆け込んでいった三人の男たちと、アンジェリカだったのだ。

「……もう薬は十分だって、何度言ったら分かるんだい。帰ったらそう弟に伝えときな。ほら、売り上げ持ってとっとと帰りな」

「あ、姐さん、勘弁してくださいよ。怒られるのは俺たちなんすから」